

◎ 金城光夫

(琉球スピリット作家)

# 目の真力

ま

りよく

目で見える思いこそが創造のしくみ

目が心であり、その心が王です

さあ、秘密を知る準備はできたでしょうか？

## はじめに

「つぎの本は、書いているのか？」

タンポポおじさんにそう聞かれて、僕はビックリしました。

「えっ、つぎの……ですか」

デビュー作の『わたしは王』を書き上げて、まだ間もないタイミングだったからです。

「そう。『わたしは王』は、言うなればチンダミ……だ」

チンダミとは、三線さんしんの音あわせをあらわす沖縄の方言です。

つまり「これからが本番」と、タンポポおじさんは示唆していました。

「つぎの本こそ、大切なんだ。

おまえなら、もう書けるだろう？　はやく書きなさい」

僕はアセりました。

タンポポおじさんから、

「とにかく、書いてみる」と促<sup>うなが</sup>されて書いたのが『わたしは王』。

「つぎも考えろ」とハツパをかけられてはいましたが、

「デビュー作で売れなかったら、二作目で挽回」くらいに捉<sup>とら</sup>えていたのです。

『わたしは王』が前フリで、

二作目がメイン……とシリーズ化構想(?)だったなんて、

そのときはじめて知りました。

が、タンポポおじさんの説法は「目」をテーマにしたものが多く、

「つぎに書くなら、目！」と、決めてはいたのです。

前作で「王は、目にいる」と明かしましたが、それがいかにすごいヒミツなのか……知るに至ったのは、本を出版してからでした。

「世界じゅうどこを探しても、まだ明かされていない『目』のヒミツ。

それは、ほかの誰でもない……お前だからこそ、書けるテーマなんだよ。これはきつと、すごい本になるぞお〜」

タンポポおじさんから楽しみに焚たきつけられて、

「はい！ 世界初の本を、書いてみせます」

と、思わず宣言して書きはじめたのが、本書「目の真力まぢりよく」だったのです。

さしあたっては、前作「わたしは王」とあわせてお読みいただきますと、より理解が深まるのではないかと思います。

目の真力◎目次

はじめに 1

第1章 目の真力まりよく

天才の見つけかた

目の秘密

目のつけどころ

目は心

胸は空っぽ

目からの投影

66 59 46 34 22 10

目力革命

世界の中心

85 77

第2章 目の真術ましゆつ

目の真術ましゆつ

目の勉強術

勉強と学問

目の仕事術

98

106

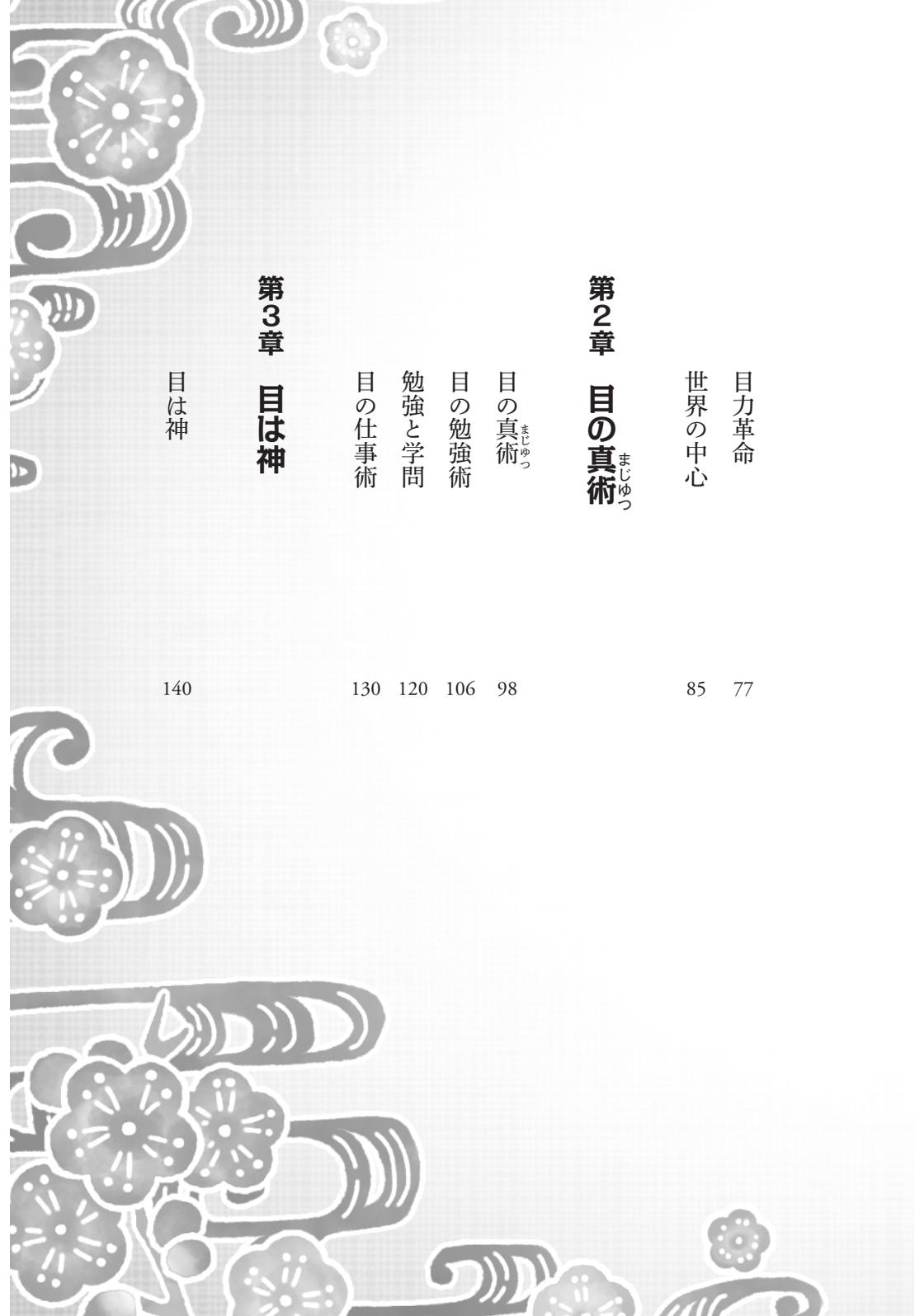
120

130

第3章 目は神

目は神

140



第4章 振慶ぶりきな宮物語

神は幻

神の業

神のルール

神の眼差し

神の運命

神との対話術

神の山

山の秘密

七〇年目の思い

永遠の夜明け

217 213 209 204

190 183 171 162 155 147

## 第5章 タンポポおじさんと、それからのこと

タンポポおじさんとは？

それから……

それから、それから……

244 233 228



第1章

---

目の真力まりよく



## 天才の見つけかた

「あのなあ、人はみんな天才なんだよ」

誰かが訪ねてくると、タンポポおじさんは決まってそう言います。

この本を読んでいる人も（読んでいない人も）もれなく天才……の、はずなのです。が、ほとんどの人は、そう言っても信じてくれません。

僕は、それが残念でならないのです。

みんな「天才」と言われても、

自分が「天才」と自覚していないので、

ピンとこないのです。

執筆するさい、タンポポおじさんは何度も

「天才と自覚して書きなさい」と、僕に言いふくめました。

「天才と自覚して書くから、天才になるのです」と。では、どうやったら

「天才と自覚」できるのでしよう。

「わたしは天才だ！」と唱えても、すぐに意識が変わるわけではありません。

「わたしは天才だ！」と

「思いこんだら」天才になれるわけでもありません。

「思いこむ」というのは、たとえば……。

催眠術さいみんじゆつで、鳥になったと「思いこむ」。

男が、女になったと「思いこむ」。

というように、

当人にとってはともかく、

客観的には「なにも変わっていない」状態を示します。

どこまでいっても「思いこみ」は「思いこみ」でしかなく、

鳥だと「思いこんでも」空を飛べるわけではなく、

女だと「思いこんでも」男に子どもは産めません。

おなじように、

天才と「思いこんでも」

天才の偉業いざやうを成しとげることとはできません。

いわば、

天才と「思いこんで」

天才に「なりきっている」だけの状態なのです。

「思いこみ」と「自覚」は似ているようで、まったく別モノなのです。

なにかを「研究」「分析」する行為にも、

おなじようなことが当てはまります。

たとえば……。

日がな一日、アリの観察していれば、

アリの「習性」

アリの「生活習慣」

アリの「好み」

アリの「ニガテなもの」

など、アリについて詳しくなります。

それを二〇年も続けていけば、

やがては「アリ博士」となって、研究分野のエキスパートになれるでしょう。

が、どんなに

「アリについて」詳しくなっても、

「アリの気持ち」がわかるわけではありません。

対・人間にもおなじことが言えます。

人は、他人にはなれないのです。

「相手の気持ちになって」考えることは大切ですし、

「相手の気持ちになって」考える行為＝思いやり……そのものは、  
すばらしい愛のカタチです。

が……当然ながら、

それが「相手の気持ち」かどうかは、べつの問題です。

限りなく「相手の気持ち」に近づけたとしても、

やはり「相手の気持ち」は、相手にしかわかりません。

そういうわけで、

「天才」の気持ちは「天才」にしかわからないのです。

「天才」と「思いこんでいる」うちは、

「天才」の気持ちを、外側から想像しているにすぎません。

いつだったか、

「条件を満たせば、天才になれる！」

というキャッチフレーズを目にしたことがあります。

でも……人は「天才になる」ことはできません。なぜなら、

人は「もともと天才」だからです。

「天才」に条件などありません。無条件で「天才」です。

「天才」になろうとすると、みずからを

「天才」から遠ざけます。

「天才」になろうとするのは、

「天才」でなくなる努力をしているようなものです。

「私は、人間だ！」と、必死に

「思いこもうと」したりしないですよね？

「思いこんでも」「思いこまなくても」

「すでに人間」だからです。

おなじように、

「天才」は

「天才」と

「思いこむ」必要がありません。

あなたは「すでに天才」なのです。

が、

自分は「人間」と知っていても、

自分は「天才」と知らない人がおおいようです。

でも……誰かに教わって、

「人間」と知ったわけではありませんよね？

「天才」も、まったくおなじです。

あまりに「あたりまえ」すぎて、気がつかないだけなのです。

「天才」は、ほかの人にできないことを

「あたりまえ」にこなします。

まわりから見ると「天才」ですが、

本人にとっては「ふつう」なのです。

ゆえに、

「天才」と言われてもピンとこないのかもしれませんが。

「天才」 Ⅱ 「とくべつな能力」という先入観も、それを助長しています。

みんな、思いちがいをしているのです。

「できない」ことを

「できる」のが

「天才」と思っています。

が、

「できない」ところに

「天才」はいません。

「できる」ところにいるのが

「天才」なのです。

人間は、二足歩行の「天才」です。

人間ほど、二足歩行に長けた動物はいません。

でも、

「あたりまえすぎて」誰もそれを

「天才」と思わないのです。

「ふつうに」

「だれもが」

「できること」……と知っているのです、

「天才」と結びつけられないのです。

「あなたは、天才だよ」と言われると、

自分がとくべつな存在になったように思えて、気持ちがいいものです。

が、

「みんな天才だよ」と、言われても……あまりうれしくありません（笑）。

「みんなが、とくべつ」ではなく、

「あなたは、とくべつ」と言われたいのです。

だから、

「あたりまえ」に

「天才」ということを、見逃してしまうのです。

が……言ってしまうば、

人間は「生まれてきただけで」すでに「天才」なのです。

「天才」になろうと努力する人がおおいのですが、「天才」になろうと努力する必要なんてないのです。

僕もすでに「天才」ですし、みんなすでに「天才」です。

にわかには信じられないかもしれませんが、これはまぎれもない事実です。

「天才」になろうとするのではなく

「天才」と知ればいいだけです。

「天才と自覚する」とは、そういうことです。

それでは、

そもそも「天才」とは何なのでしょうか？

それは、何万年ものあいだ、隠べいされてきた秘密です。

「天才」のカギをにぎるポイント……それは、ずばり「目」にあります。

「天才」のゆえんは「目」なのです。

「天才」と「目」。

その関係を少しずつ、つぎの章で明かしていきたいと思います。

## 目の秘密

「目は、口ほどにものを言う」

昔からあることわざですが……真意を理解している人は、  
いったいどれくらいいるのでしょうか？

「目を見ると、その人の言わんとすることがわかる」

「だいたい、そんな解釈になりますよね。」

「それについて、僕も異論はありません。」

「ただ、

「口ほどに」「ものを言う」という部分に疑問をかんじます。」

「口ほどに」……?」

「まるで、

「口から」発せられる

「ことば」に一番エネルギーが宿っていて、

「目」は二番手と言っているかのようなようです。」

「でも、ほんとうに、

「目」は

「ことば」を補佐するツールにすぎないのでしょうか……？

人間には「五感」があります。

「みる（見）」

「きく（聞）」

「かぐ（嗅）」

「さわる（触）」

「あじわう（味）」

それら「五感」への橋渡し役として、

「目」

「耳」

「鼻」

「手」

「口」

という「ツール（器官）」があり、  
それら「ツール」によって「五感」を感じているとしたら……。

そのとき、

「自分」はどこに「存在」していると思いますか？

「頭」と思う人もいれば、

「胸」と答える人もいます。

「身体と分離している」と考える人もいます。

が……じつは、

「自分」とは

「目」そのものなのです。

僕はさいしょ、

「自分」は「胸」にいたると思っていました。それなので、

「自分」は「目」と知ったときは意外でしたが、

「胸」と思っていたときはボヤけていた

「自分」の存在が、

「目」と知ったときからハッキリと、身近な存在に感じられるようになり……。

リクツぬぎに、腑に落ちたのでした。

このくだりは、

前作「わたしは王」でも「王のいる場所Ⅱ目」として、ふれています。

「自分」は六〇兆の細胞の代表であり、同時に

「王」である。そして、

「王」が存在する場所こそ

「目」なのだ……と。

このとき、

「王」は、

「目」の

「どこか」にいるのだと、解釈している人がいるかもしれません。

僕もそう思っていました。

が、タンポポおじさんとの対話のなかで、そうではないとわかったのです。

まず前提として、

「自分の目」があるのではなく

「目そのもの」が

「自分」なのです。

「目」のツールとして、

「手」があり

「口」があり

「耳」があるのです。

もっと言えば、

「からだ」は

「自分」である

「目」が五感をかんじるためのツールでしかない、ということなのです。

「じゃ、目の見えない人は……？」

との疑問が生じるかもしれませんが、

「物理的に」見えないだけであって、

「目」がないわけではありません。

「目」はあるのです。

世の中は、物理的な世界だけで成りたっているわけではありません。物理的なものが占める割合は二〇%ていど……という説もあります。

つまり、

二〇%の部分が見えないだけであり、残りの、

八〇%は見えているのです。

この宇宙に存在しているもの……すべては「波動」であり、

「色」

「物質」

「匂い」

「音」

などの「波動」をキャッチするためのツールこそ、

「目」であり

「耳」であり

「口」

「手」

「鼻」なのです。

「目が見えない」ということは、

「物理的な」ものや色が認識できないだけであり、

(五感のうち) 四感は、

「見る(＝感じる)」ことができる……ということなのです。

「目」とは、

「物理的に」ものを見るだけのツールではなく、「波動」を

「見る（＝感じる）」ことができるのです。

「耳」で「聞いて」なにかを「見る」

「手」で「さわって」なにかを「見る」

つまり、

「目」は、

「物理的に見えるもの」も

「物理的に見えないもの」も

「見ることができる」のです。

そして、

「見ることができる」のは

「天才」であり、

「見ることができる」

「目」をもっている、すべての人は

「天才」といえるのです。

だから、僕は「天才」であり、

すべての人も「天才」なのです。

さらに……。

からだの各器官が大切なのは言うまでもありませんが、それらすべてが「目のために」存在している……というのは、衝撃的な事実ではないでしょうか？

でも、

「目」……ひいては、

「見る」チカラというのは、  
おおげさでなく人生を左右し、  
創造するエネルギーに満ちているのです。

「目」は、

「自分」であり

「王」であり

「創造主」であり

「神」なのです。

さて、

「神」が

「見る」世界とは……？